

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20530376

研究課題名(和文)

超企業ネットワークの戦略形成過程における信頼と文脈性に関する実証研究

研究課題名(英文)

Study on trust and the context in the Process of formation of strategy in the trans-organizational network

研究代表者 小松 陽一 (KOMATSU YOICHI)

関西大学・総合情報学部・教授

研究者番号：10068140

研究成果の概要(和文)：

企業間ネットワークにおける信頼形成過程に対する参照モデルを構築するための準備作業を展開してきた。このとき、M.ポラニーの主張するような「研究室の伝統」という意味での「暗黙知」、あるいはサッチマンに代表される「状況的認知」の視点から、複数のアクターが織りなすハイブリッド(異種混合体)のネットワークの協働行為(実践)に注目することにした。そして、そのような実践を通じた「新しい手続きの蓄積」すなわち「実践を通じた学習」に着目することで、企業間ネットワークにおける戦略策定過程に対する独自の参照モデルを構築するための理論基盤を整備してきた。近年の経営戦略研究におけるキーワードの一つである「実践」に注目することで、より実践的な参照モデルの構築が可能になると考えたからである。なお、本研究でいう「実践を通じた学習」とは、現場の意思決定ないし問題解決を通じて、ある新規手続きが「手続き的記憶」として組織記憶として残り、結果的に、新たな行動レパートリーが浸透する場合を指している。そして、予備的考察を通じて、組織間ネットワークにおけるコンテキストと信頼構造こそが、あるルーティンが組織記憶として蓄積され浸透するか否かの試金石に他ならない、という仮説を抽出するとともに、企業のみならず地域社会を取り巻く多様なアクターによるコンテキスト創造に関する事例を分析することができた。そこでは、行為主体のネットワークが織りなす「意図せざる結果」の中で、既存の事象や概念の意味転換(翻訳過程)を通じて、より求心力の強い信頼性が醸成される過程を明らかにした上で、ネットワークにおける意味創造(転換)メカニズムに、歴史性(経路依存性とコミットメント)や地域性(ドミナントロジック)が深く関わっている点について、事例を通じて明らかにした。

研究成果の概要(英文)：

In this study, we have been preparing to build a reference model for trust formation process and the context of inter-firm networks. At this time, "traditional laboratory" in the sense of "tacit knowledge", or "situated cognition (embedded in the situation)" focused on point of view. From these perspectives, considering the practice of a hybrid network consisting of multiple actors. And we are challenged that to build a reference model of trans-organizational network through such practices (i.e. "the accumulation of new procedures," or "learning through practice"). Here, "learning by practice" means that a new procedure remains as a procedural memory (or an organizational memory) through the decision making of the spot and that a new action repertoire infiltrates. The hypothesis of such a model construction "Only the context and the trust structure in the trans-organizational network are just keystones whether a certain routine is accumulated as an organizational memory and infiltrate" has been extracted through the practices. In addition, we analyzed the case with the context creation by various actors who surrounded not only the enterprise but also the regional society. In there, it has extracted that an actor's role. It is the sense making function through the translational process. In addition, we clarify to the sense making mechanism of the relations in the trans-organizational network having worn the path dependency and dominant logic through the case.

交付決定額

(金額単位：円)

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2008年度 | 600,000   | 180,000 | 780,000   |
| 2009年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 2010年度 | 700,000   | 210,000 | 910,000   |
| 年度     |           |         |           |
| 年度     |           |         |           |
| 総計     | 2,600,000 | 780,000 | 3,380,000 |

研究分野：経営学

科研費の分科・細目：経営学

キーワード：企業間ネットワーク、情報戦略、戦略形成過程

### 1. 研究開始当初の背景

本研究を計画していた当初、デコンストラクションやバーチャルインテグレーションと呼ばれる事業構造改革が盛んに議論されていた。それは、単独の企業組織だけで総ての業務活動を抱え込むのではなく、複数の企業連合体が「あたかも単一の企業体のように振る舞うバーチャルコーポレーションを目指す概念である。

このとき、業務間の連携の円滑化のために、異なる行為主体の間の接点すなわちインタフェースを整備することで、連結の透明化を実現することが重要となる。そして、改めて言うまでもなく、このような動向の背後には、ITにおける驚異的な技術革新を指摘する必要がある。

ところが、現実には、ITは「銀の弾丸」ではない。むしろ、異なる企業間において、業務活動の相互連結を実現するためには、技術システムだけでなく、そこで働く人びとの心理的側面（組織慣性＝変革に対する心理的抵抗）を無視することはできない（Markus and Robey,1988）。

そして、このような「組織の文脈性（コンテキスト）」こそが、ITのオープンエンド性に大きく影響を及ぼし、その効果を左右する要因と言える。もちろん、ITの活用により、参加主体が、組織行動の背後に見え隠れするコンテキストに気づく場合が少なくない。意識化されたコンテキストに新しい解釈が施されるとき、コンテキストは再編されることになる。オープンエンド性を帯びたITは、コンテキストによって、あたかも陰極線に電子が引き寄せられるように、その活用方法をコンテキストに相応しい方向に引き寄せられることになる。他方、IS構築は、既存の組織活動をシステムと手続きの視点から見直すことに他ならない。このとき、システム構築を通じて、既存のコンテキストを意識することになり、ときには、コンテキストを革新す

る契機となる場合がある。以上のような関係を創発特性と認識し、創発特性による草の根的な戦略形成過程を説明する論理を探ることが、本研究の課題である。

### 2. 研究の目的

以上のことから、本研究の目的として、次の2点を設定した。

- (1)単独でなく、複数の企業組織によるネットワーク（超企業ネットワーク）の戦略形成過程について、これまでに展開されてきた研究の到達点を概観し、これを批判的に検討する。
- (2)上述の批判的検討に基づき、企業の枠組みを超越するネットワークに参画する行為主体である各企業が、情報化や各種事象を通じて相互信頼性や新たな業務遂行の前提条件ないし文脈性を構築することに注目し、戦略の創発過程に対する新しい分析視角の提唱を試みるものである。

このとき、結論を急げば、創発的視角のカギは、IS（ここでのISは、コミュニケーションシステムという広義のISであり、いわゆるコンピュータシステムに限定するものでない）のオープンエンドにある。ISそれ自体は価値中立的であり、利用の状況ないし文脈性によって、その効用が大きく異なるという特性である。このとき、構築されるシステム特性によって、オープンエンド性が消失するのであれば、そのメカニズムを解明することは重要な課題であろう。しかし、先行研究では、そのような試みはなされていない。仮に、基幹系システムにおいては、創発的視角よりも、前述の島田が指摘するように「スパイラル」の視点が有効なのであれば、その論理を解明する必要がある。

以上のことから、ISと組織の関係性における創発的特性に注目するとき、われわれに残された課題は、大きく次の2つに集約できる

と考えられる。

(1)事業システムを支える基幹系業務システムにおいて創発効果がみられるのか

(2)基幹系業務システムにおける創発効果による事業革新の論理が存在するのか

これらの課題の解明するための手がかりを得るために、本研究では、異なる行為主体の間で共役可能な文脈性の形成過程を「行為主体間の信頼」という切り口で理論化を試みたい。

なお、このような課題に挑戦する意義について指摘しておきたい。

第1に、経営学の領域で近年とみに注目されながら理論化が遅れてきた概念である「事業活動におけるコンテキスト」を正面から取り上げ、戦略形成過程における意義という視点から、概念間の関係を明らかにしようとする点にある。

第2に、自社の得意領域に特化するという単純な「能力論」でなく、超企業ネットワーク全体の視点から自社戦略の変更を余儀なくされる場合の戦略変革（組織能力の再編成）過程を射程とする動的な戦略過程論を展開する点にある。

第3に、近年とみに注目を浴びている「知識ベース論 (McDermott,1999)」の議論で注目されている「組織ルーティンの編成原理」を信頼形成とコンテキストという視点から検討を加える点にある。すなわち、状況的認知や社会構成主義の知見をもとに、日常ルーティンに相互信頼や文脈性が埋め込まれていくメカニズムに初めて光を当てるパイオニア的研究として位置づけられる。

最後に、インターネットビジネスにおける信頼形成の重要性は、Peter Keenをはじめとして国内でも多くの研究成果が出てきつつある。しかし本研究は、信頼やコンテキストをキーワードに、超企業ネットワークの参画主体における個別の戦略転換とネットワーク全体の戦略形成の関係性を取り上げる光を当ててパイオニア的研究として位置づけられる。

### 3. 研究の方法

繰り返しをいとわず強調すれば、本研究の意義は、複数企業から構成されるネットワーク型事業システム（超企業ネットワーク）の戦略形成過程、とりわけ「参画主体間の相互作用による個別企業の戦略転換過程」に注目する点にある。このことは、いわゆる「サプライチェーンマネジメント」や「バーチャルコーポレーション」のような「鳥瞰的視点から展開される全体最適化の議論」が看過する傾向が強かった「参画主体の主体的変化」すなわち「自社の位置づけの再解釈による戦略転換過程」に注目する点に留意する必要がある。そして、その手がかりとして、「信頼

と「コンテキスト」という2つのキーワードに焦点をあてて研究を展開していく点に本研究の独自性があると言える。言葉を換えれば、「鳥の目」でなく「虫の目」から見た全体最適化推進の動的過程の解明を主題としている。それゆえ、先行研究で採り上げられてきた事例研究を中心に、われわれが超企業ネットワークと呼ぶ（べき）事例の特徴を公刊された事例研究や雑誌記事など各種商用データベースを用いて精査すると同時に、聞き取り調査や内部資料へのアクセスを通じて、理論的な分析枠組みを構築したい。

さらに、本研究の方法論的特徴は、超企業ネットワークを参画主体の視点から考察を加えることにより、現場の持論に注目する点にある。現場の試行錯誤や意識改革に関わる持論 (theory in use) に注目することにより、超企業ネットワークのマネジメントに関わる実感のこもった提言を可能にしたい。加えて、欧米の議論を咀嚼するだけでなく、わが国のものづくりの現場で培われてきた持論に注目し、現場発の理論を構築することにより、諸外国にわが国初の理論を発信していきたい。

## 4. 研究成果

### 4.1. はじめに

まず、コンテキストの意義について概括しておきたい。一般に、コンテキストとは「前後関係、文脈、背景、状況、場面」などを意味する。そこから、IT活用の状況性=コンテキストという考え方が注目されてきた。

このようなコンテキストの意味形成作用については、次に示す思考実験（エクササイズ）を考えることで、容易に理解できよう。

それは、四枚の絵 — (1) 風船をもって駆けるウサギ達、(2) たくさんの風船を手にとって宙に舞うオオカミ、(3) 泣いているウサギ達、(4) ウサギ達に話しかけるオオカミが描かれている — を組み合わせて物語を考える、というエクササイズである。

このとき、それぞれの絵が「コンテンツ」、物語（絵のつながり=前後関係）が「コンテンツ」に相当する。

読者諸氏はどのような物語を想像されただろうか。例えば、次のような物語が考えられる。風船を手には野原を駆けめぐるウサギ達のもとに、オオカミがやってきて、巧妙に話しかける。そして、オオカミは風船を奪い取る。ウサギ達は泣き叫ぶ。しかし、オオカミも風船の浮力で空高く舞い上がり困ってしまう。悪い事をすれば報いを受ける、という筋である。

他方、次のような物語も可能である。すなわち、泣いているウサギ達の下へ、風船をたくさんもったオオカミが空から降りてくる、

という展開である。風船をもらったウサギ達は大喜びで走っていった。いわば、幸せを与えてくれる物語である。

これらの二つの物語を比べるとオオカミの位置（意味）づけが大きく異なる。そのような位置づけを決めるのは、コンテンツ（絵）ではなく、物語（文脈）である。

以上のように、コンテキストは、各断片をまとめて意味を紡ぎ出す作用をもつ。ここから、企業を超克するビジネスシステムの編集原理として「各参画主体のおかれている状況」に注目し、そこから紡ぎ出される全体性ないし創発性に注目しようという発想であると言える。

さらに、事業活動におけるコンテキストの概念を理解するために、消費者のコンテキストについて指摘しておこう。このとき、消費者のおかれたコンテキストは、(1)経時的コンテキスト、(2)共時的コンテキスト、(3)パラテキストに大別できる。

まず、経時的コンテキストとは、消費者の個人データや購買履歴から予測される「現在ないし将来に片付けたい問題状況」を意味する。ハード（ICタグなどの個体識別技術）とソフト（データマイニング・ツールの開発）の両面における著しい技術革新を背景に、消費者一人ひとりの購買履歴の蓄積と、それを用いた共通の嗜好をもつ人々の購買性向の探索するための技術環境が整備されたことから、購買時などにクロスセリングなどのプロモーションをタイミングよく行うことが可能になってきた（ただし、個人データの活用は、プライバシーの問題を抱えているために、消費者に不快感を与えてしまう危険性も少なくない。この限りにおいて、当意即妙の提案となるか、不快感の元凶となるか、諸刃の剣といえよう）。

次に、共時的コンテキストとは、「消費者が〈いま・ここ〉で抱えている問題状況」を意味する。イノベーション研究の泰斗であるMITのクリステンセンらは、「ミルクシェイク」を例に、「通勤中の車内での軽食」と「子どもと一緒にの食事」という異なる状況を示し、それぞれの商品に求められる機能（意味）が異なると指摘する。そして、顧客ではなく「状況」に注目する重要性を強調している。このような〈状況性〉を「共時的コンテキスト」と呼ぶことにしよう。

最後に、パラテキストとは、提供される商品やサービスに対する背景情報を意味し、商品やサービスを体験する前に、その意味を大雑把に方向付ける機能を持つ。前述のオオカミとウサギの物語の例では、エクササイズを提示する状況性が、これにあたる。具体的には、商品やサービスを提供する主体や場所などを指摘することができる。

このように、一口に「コンテキスト」とい

っても、その焦点は大きく相違することに留意する必要がある。もちろん、超企業ネットワークを構成する参画主体のおかれたコンテキストと消費者コンテキストを同列に議論することはできない。しかし、参画主体のコンテキストもまた、経時的コンテキスト、共時的コンテキスト、パラテキストに分けて考察することは有用であると思われる。

さて、本研究の初年度では、超企業ネットワークにおける信頼形成過程およびコンテキスト形成過程に対する参照モデルを構築するための準備作業に費やされた。とくに、社会的構成の議論や制度化、アクターネットワーク理論などの視点を手がかりに、予備的考察を展開し、その過程において、方法論的意義に注目した論考として、「解釈主義研究の射程」を発表した。

#### 4.2. 超企業ネットワークの事業ダイナミズム

次に、企業だけでなく行政を含めた産業支援ネットワークにおける行為主体間の信頼形成過程および戦略形成（ないし戦略転換）過程について、上述の「解釈主義」の視点に加えて、地域性（あるいは、ドメスティックな論理）を手がかりに、事例研究を行った。

取り上げた事例は、帯広市の「北の屋台」における事業ダイナミズムである。

事業は事業戦略を構想し計画するだけでは実現しない。改めて言うまでもなく、事業戦略の構想・計画は実行されなければ実現しない。あるいは、事業戦略の構想は、そもそも最初から完全な姿で出現するわけでもない。事業戦略の構想と実行は時間をかけて相互拘束的に往還するのである。少なくとも「北の屋台」の事例は、このような事業ダイナミズムの存在を強く示唆している。屋台によるまちづくりという構想が創発したのは1999年4月であり、ここにたどり着くまでには、そもそもの発端である帯広商工会議所による新大学の設立提言から数えると、実に8年間もの年月が経過している。

実現までの長い年月を経て、「北の屋台」が地域活性化事業として成功した理由、すなわち「北の屋台」における有効な事業ダイナミズムの条件とは何か。「北の屋台」の事例からは次の5つの要素が抽出できる。すなわち、①持続する意志、②柔軟な資源の動員、③変化適応性、④理念・価値観の共有、⑤以上の4要素の相互強化、である。

事業戦略の構想がその実行との間で相互拘束的な往還の関係にあるといっても、変わることなく持続する構想の部分がある。「北の屋台」の場合、帯広市や十勝地方全体の活性化や発展が関係者、とりわけ「変革型リーダー」としての坂本氏が持ち続けた志、すなわち持続する意志の中身であったと思われる。意志が持続するには、自己と自己を超える存在（例えば、自己の住む地域社会）への愛

情を両立的に抱いている人間がいることが必要であろう。持続する意志は、現実の条件からたとえそれが実現しなくても、言葉や形で残すことで表現される場合もある。

持続する意志は柔軟な資源の動員を通じて実現する。「北の屋台」が実現するまでに人材や資金など様々な資源がその時々が必要に応じて動員されているが、とりわけ人材に関しては、意気を感じて手弁当で馳せ参じるボランティアの存在が重要である。そのためにはレポートやマスコミ等を通じた情報発信が有効であるようだ。上質なボランティアが確保できない場合に備えて、スラック（資源的余裕）が必要となることも多いと思われる。「恒産なき者は恒心なし」という孟子の教えはこのことと関係がある。

柔軟な資源の動員をも含めて状況の変化に対する適応性は有効な事業ダイナミズムの要件である。変化適応性は、事業が壁にぶつかったときに、「虫瞰図」の世界から「鳥瞰図」の世界、あるいは「神瞰図」の世界へと「視点の転換」できるかどうか、いわゆる「大所高所」に立った判断ができるかどうかによるものと思われる。袋小路に陥った時に、本質論を議論することはこのことに関連するといえよう。

「視点の転換」は持続する意志の表明としての理念や価値観の共有を実現するための条件でもあるだろう。暗黙知の表出化（注36）はアクター間のコミュニケーションを精緻化し、間主観性の相互理解を促すであろうが、それが理念や価値観の共有に至るためには、アクター間で「視点の転換」が実現することが必要であろう。

最後に、既に黙示的に示してきたように、持続する意志、柔軟な資源動員、変化適応性、理念・価値観の共有は相互に関連している。有効な事業ダイナミズムの特徴は、これらが相互強化的に、いわばポジティブフィードバック的に関連し合っていることであろう。何らかの理由でこのような関連性が失われるとき、事業の将来に黄信号が灯ることになるであろう。

以上のように、行為主体のネットワークが織りなす「意図せざる結果」の中で、既存の事象や概念の意味転換（翻訳過程）を通じて、より求心力の強い信頼性が醸成される過程を明らかにした上で、ネットワークにおける意味創造（転換）メカニズムに、歴史性（経路依存性とコミットメント）や地域性（ドミナントロジック）が深く関わっている点について、事例を通じて明らかにしてきた。

#### 4.3. 組織能力の解明

次年度は、戦略概念と組織能力概念の文献レビューを中心に研究を進めてきた。このとき、M.ポラニーの主張するような「研究室の伝統」という意味での「暗黙知」、あるいは

サッチマンに代表される「状況的認知」の視点から、複数の行為主体（アクター）が織りなすハイブリッド（異種混合体）ネットワークの協働行為（実践）に注目することにした。そして、そのような実践を通じた「新しい手続きの蓄積」すなわち「実践を通じた学習」に着目することで、企業間ネットワークにおける戦略策定過程に対する独自の参照モデルを構築するための理論基盤を整備してきた。近年の経営戦略研究におけるキーワードの一つである「実践」に注目することで、より実践的な参照モデルの構築が可能になると考えたからである。なお、本研究でいう「実践を通じた学習」とは、現場の意思決定ないし問題解決を通じて、ある新規手続きが「手続きの記憶」として組織記憶として残り、結果的に、新たな行動レパートリーが浸透する場合を指している。そして、予備的考察を通じて、組織間ネットワークにおけるコンテキストと信頼構造こそが、あるルーティンが組織記憶として蓄積され浸透するか否かの試金石に他ならない、という仮説を抽出することに成功した。加えて、「実践を通じた学習」という視点に立脚することで、ビジネスモデル創出などの事業革新は、いわゆる「辺境」が優位であるとは言えない点、むしろ革新の契機は、伝統の中から「微妙な差異」が創発されるのではないか、という仮説を抽出した。

さらに、コミュニケーションネットワークを通じた「即興の徒弟」という参照枠組みを採用することにより、表層的なLLPやCOPの議論を超越する「周辺からの参画＝異端の重要性」を指摘した。

#### 4.4. 企業間ネットワークにおけるコンテキストと信頼の創造：事例分析

最後に、組織間ネットワークにおけるコンテキスト創造の事例として、「北野工房のまち」を取り上げ、考察を加えた。

事例より、コンテキストは、超企業ネットワークを構成する参画主体（アクター）の日常業務の中に潜んでいる点を明らかにした。しかも、コンテキストは、各アクターの実践を通じて、問題が回顧的に再編成されるという性質を帯びている。「北野工房のまち」の物語にせよ、「北の屋台」の物語にせよ、各アクターによる自発的な実践を通じて、全体の物語が醸成されていると考えられる。

そのような物語は、ともすれば、場当たりので、切羽詰まったあげくに「ありあわせの要素」を組み合わせた「ブリコラージュ」となる可能性が高い。虫歯が痛むと世界中の動きが無視され、全神経が口腔内に集中するように、〈いま・ここ〉に直面した問題を解決するために、見るもの手にするものが「問題解決の道具」に見立てられる。そして、共時的コンテキストだけでなく、経時的コンテキストを射程に入れるならば、必然的に、消費

者の行動範囲という境界を設定する必要がある。そして、問題解決の舞台は、そのような閉じられた時空間の中にある。したがって、超企業ネットワークにおけるコンテキスト形成は、広くアクターの状況性を把握するという視点に立脚しつつも、アクターのおかれた境界＝地域性を考慮する必要がある。このとき、閉じた境界＝閉空間は「地域性」と言い換えることができる。B級グルメの場合、ご当地という閉じた空間の下で、「旅の思い出」という物語を創出する一要素として、地域の伝統行事や歴史がパラテキストとして取り込まれた重層的な商品と理解できる。上述の2つの事例を改めて引用するまでもなく、重層的なコンテキストを織りなすことで紡ぎ出される物語は、語り継がれていく物語であり、終わりのない永遠の物語といえる。

しかも、そのような物語は、限定された空間の中で、利用可能な資源を新たに「見立て」ながら、問題を解決していく軌跡を描いた「私（だけ）の物語」である。そのような個別の物語を積み重ねていく「私歌集」がコンテキストの総体といえる。この限りにおいて、物語の個性性を彩る上で、地域性というパラテキストは重要である。私の物語は、故郷の物語でもあるからだ。それゆえ、地域性というパラテキストの下で、地域性を帯びた共時的コンテキストと伝統を再解釈しつつ継承するという経時的コンテキストを考慮する研究接近方法を指摘することができる。

とはいえ、実証可能なモデルの構築という課題が残された。今後、これらの結果をもとに、さらなる精緻化を行うとともに、ISとの関係性をより鮮明にする事例の作成に取り組んでいきたい。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計6件)

1. 古賀広志(2011)「IT経営モデルの構築」『日本情報経営学会誌』31(1), 12-24. 査読無
2. 古賀広志(2010)「組織能力論再考：生態心理学的アプローチと状況論的アプローチ」『関西大学データマイニング応用研究センターディスカッションペーパー』3,1-25. 査読無
3. 古賀広志(2010)「情報技術と組織能力：系譜と課題」『関西大学データマイニング応用研究センターディスカッションペーパー』4, 1-25. 査読無
4. 古賀広志(2009)「解釈主義研究の射程」『日

- 本情報経営学会誌』29(2),84-93. 査読有
5. 古賀広志(2009)「企業内 SNS の組織的意義」『日本情報経営学会誌』29(3),56-65. 査読有

[学会発表] (計5件)

1. 古賀広志「データベースマーケティングと情報倫理」日本情報経営学会第60回全国大会(北海学園大学)2010年5月30日
2. 古賀広志「アンゾフ再考」日本情報経営学会第61回全国大会(熊本学園大学)2010年11月21日
3. 古賀広志「経営情報論のディシプリンについて」日本情報経営学会 関西支部第211回研究会(関西大学)2010年12月4日
4. 古賀広志「パラダイムの謎：伝統(暗黙知)か辺境(異端)か」日本情報経営学会第59回全国大会(名古屋大学)2009年11月21日
5. 遠山暁・松嶋登・古賀広志・浜屋敏「IT経営力：ITインフラ、情報、組織、環境実践の総合化」日本情報経営学会第59回全国大会(名古屋大学)2009年11月22日

[図書] (計3件)

1. 小松陽一(2009)「組織間ネットワークの形成と地域経済の活性化」日本地方自治研究会編『地方自治の最前線』清文社(担当箇所15-34頁)。
2. 小松陽一・高井透(編)(2009)『経営戦略の理論と実践』芙蓉書房出版、総272頁
3. 古賀広志(2009)「システム開発と情報品質保証」関口泰毅編『情報品質の研究』中央経済社(72-90頁)

[その他]

なし

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

小松陽一(KOMATU YOICHI)  
関西大学・総合情報学部・教授  
研究者番号：10068140

(2)研究分担者

古賀広志(KOGA HIROSHI)  
関西大学・総合情報学部・教授  
研究者番号：20258312